



特60559



神

十一月五日



公卿殿上人加茂の宮居へ
 奉幣の群集とるまじく加茂の
 御齊世の宮の
 牛飼舎人櫻丸へ
 車引捨此方へ來り相
 囚の手柏子打たき招け
 戀洲の霜ふみ分て十五六
 つき風のやまゝ



御家柄
 とき落して
 宮様の逢せんとのと
 櫻丸女房八重と諸共は恥らひまき宮さまの車
 のうへ誘引て夫婦ハホツト息もつき其まき跡へ三
 言神巫の御娘かりや姫とて
 香し文い父





を尋いそぬと云てアア
ぬらずな兼て巳が濟ぬ内
物ぐさい事聞て居る取
分今日御惱平愈の神
いさめ其場所へ来て親王
てん最前ちら見御車の
内は人こそあれ御みす



五



天
神
言

引
ち
か
る
人
改
め
る
下
知
り
の
た
ち
よ
り
立
寄
る
意
を
首
筋
と
す
つ
く
ん
で
投
り
退
く
十
寺
し
き
取
り
つ
た
つ
も
立
た
し
な
る





心付や
言がく毒

仕様が有娘の
手傳ひ
どのこ
な煙

別ニはりもつて
也今日ハ七寸の
賀の祝白大夫と名
を改三人の嫁
打あつて祝の
料理も出来上
と夫くのをそおの
まきもぎつふし
の言葉も打消し
白大夫とときりほ



成程追付
奉らん普相
盛流罪と聞
り御對面
の岸の御供
奉らん女居
の葉の姫君
へ主師の里伯



母の方へ御
出上り宮様
へ法皇の御
所へ供奉
し奉り
事治りて
我身の
上榎量
あれ梅王
龍道理





齊世親王
 御沈落
 隨てつし合
 百年目と



我迎も主君
 流罪逢上
 都止
 先此方と
 配所へ行



言
けし
今日
只今
さくら
花と
此梅
玉



半
手
馴
し
半
追
竹
位
自
慢
で
肥
た
時
平
殿
の
屍
さ
ら
ニ
ニ
五
十
百
と
な
ら
ぬ
い
ま
ら
ぬ
い
ら
ぬ
の
肩
持
顔
出
ま
せ
つ
て
怪
我
ひ
ろ
く
な
や
ア

法はききぬ
た案外もの
めやしおちの
めせ引く
さきめく
松王いらつ
て命きら
そのあもれ
者何れの
もの構へ
あるな



つと取つ置つまじい
とるれつ親人の賀の
祝ひ此月是も心ま
樹る故延引心須弥
大海是非もなき世
の中と兄弟顔を見
あてて涙催す折のら
合せて涙催す折のら
鉄棒引で雑式が時平
公の御通りと言捨て
急行一何と聞たり櫻



さし申す

寺入の子の母でとんまを
明てといふは怖り
あともく女房を
引退て門口
明れ女へ會
紙し是は
師匠さまで△り件
悪さを頼み申外
どこも居やぶぞ邪
広であること云は幸



子供はあ
そへて居ます連
うへりまはあすつと連
後







先程歸と有し
時表へい出た
と小陰に立忍
始終の容子を
承り若者殺
せし夫婦
くろく八重
の死ぬ身の
こと
くろく言白
なほ片
大夫の片



此
時
の
早
く
管
相
の
其
の
鳴
世
の
旅
立
の
旅
立
の
魂
未
來
で
旅
立
此
の
言
白
な
ほ
片
大
夫
の
片

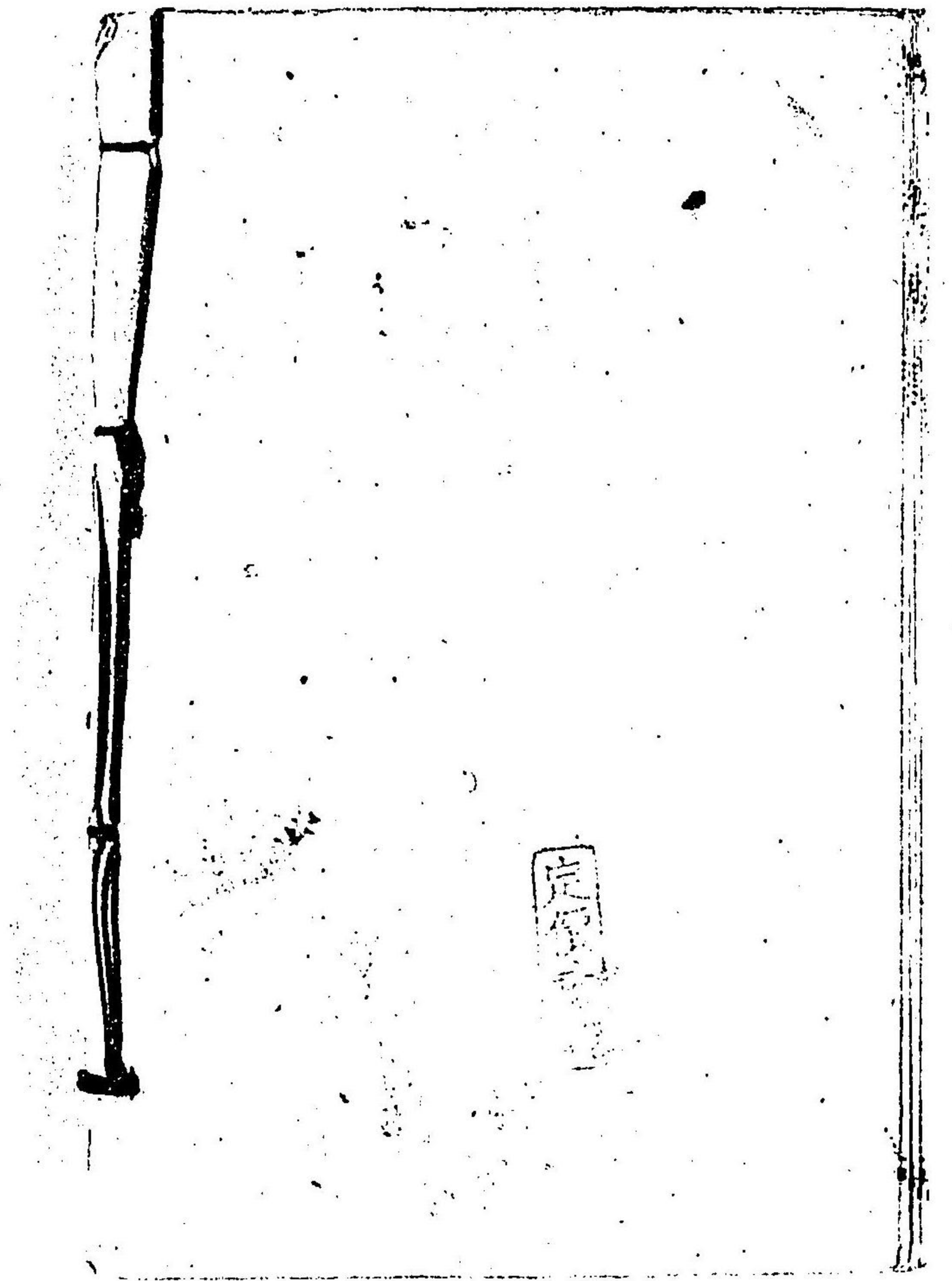


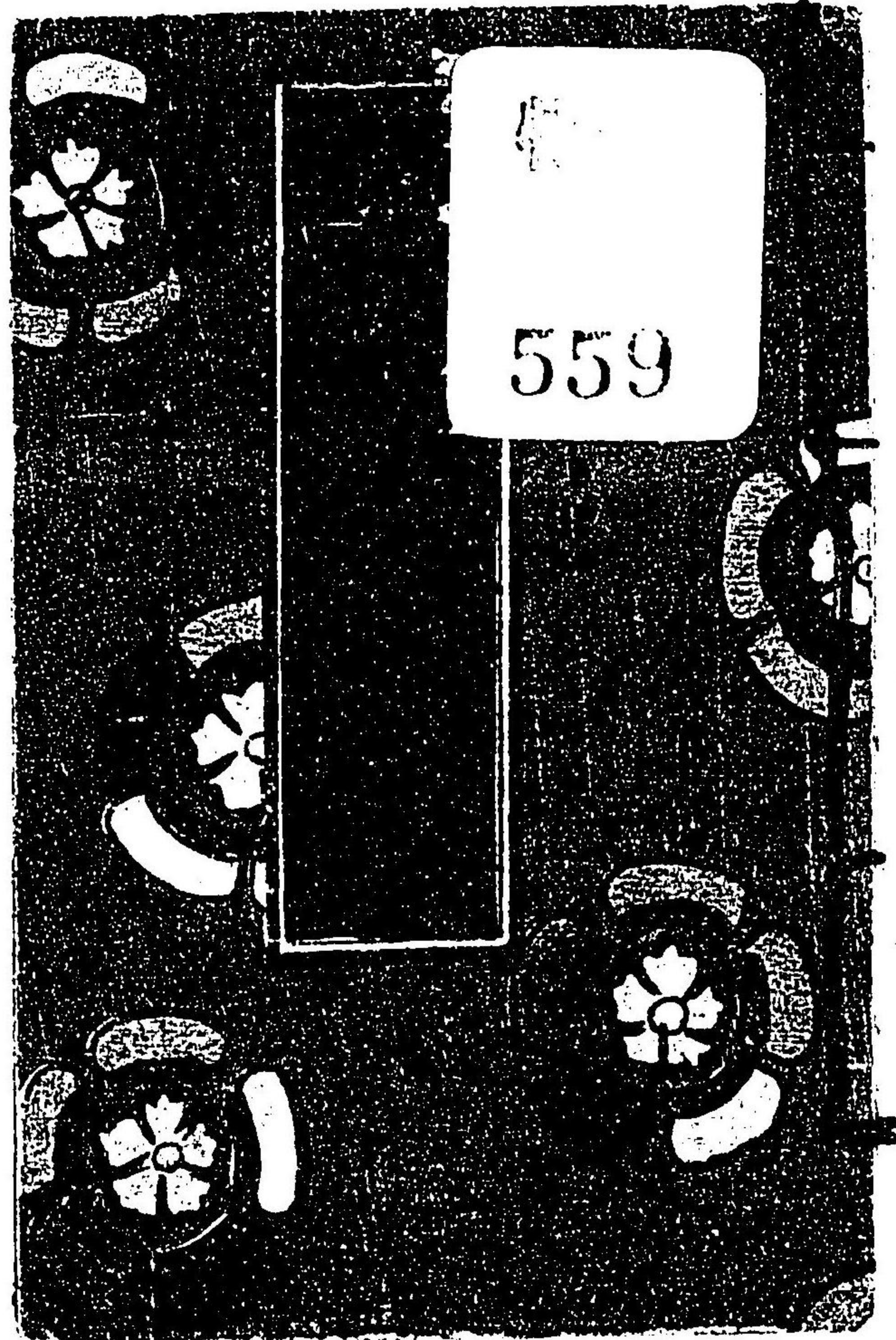
梅玉夫婦を頼むと八重の事
 迄頼み置亡體送り親送り生て
 死なば義臣末世は夫と
 夫依田の社の日跡の神の
 知る御いた
 直相巫禱者の
 罪を
 生



明治十八年三月五日御屋編輯出版人日本橋区香松甲十五番地

尾関と代





091982-001-9

特60-559

[絵本]

尾関 と代 / 刊

M18

DBP-0586

